

206. リモート時代のプレゼンテーション (?)

技術開発企画課長 糸川 浩紀

本年度は、様々な会議や学会がリモート開催となっています。8月の下水道展/下水道研究発表会が中止になったのは記憶に新しいところですが、その米国版と言える「WEFTEC 2020」(WEF=米国水環境連盟が主催する研究発表会+展示会)は、10月5~9日に完全オンラインで開催されることになっています。研究発表は、大半が事前録画ビデオのオンデマンド配信(会議期間後1年間)となります。私は1件の研究発表を行なう予定で楽しみにしていたのですが(何よりニューオーリンズに行けるのを!)、残念ながら、東京でシコシコとビデオを作る羽目になりました...。その過程で、日米間でのプレゼンテーションに対するスタンスの違いなんぞを考えさせられましたので、顛末と併せて、今回のネタとさせていただきます。

WEFTEC 2020のオンラインでの開催(あちらでは"virtual"という単語を当てています)が決まったのは6月中旬ですが、その後しばらくは、どのような発表形態となるのかも知らされず、8月になってようやくパラパラと具体的な話が飛び込んできました(会議事務局の方も、路線変更への対応が大変だったのだと思います)。結局、プレゼンテーション動画のMP4ファイルをupせよ、ということになり、発表者向けのガイドラインみたいなペーパーが提供されましたが、それによると↓(カッコ内は初見での私の感想)

- スマホでの視聴も考慮してテキストを最小限にセヨ
(あ〜、そういうことも考えるのね...、つか、スマホで見るヤツなんかいるのか?)
- フォントは42ポイント以上でガンバレ(でかつ! ま、仕方ないか...)
- スライド当り6語!(で、できるかい、そんなもん!)
- 読んで解るスライドだったら口頭説明はイラン!(はいはい...)

他には「箇条書きは避けヨ」というのがあり、始めは意味が解りませんでした。箇条書きというのは原理的に複数のトピックを列挙する表現法な訳で、「1スライドには1トピのみ!」ということなのだと思えます。...というわけで、兎に角スライドはシンプルに、という圧が物凄く、やたらと難易度上げてくるなあ、と思っていましたが、米国留学中の愛娘に同資料を見せたら「そんなもんでないの?」という感じでしたので、(最近の)あちらでのプレゼン教育は、こういうレベルのWeb仕様になっているのかも知れません。

以上はスライド作成時の話ですが、他にもビデオ作成時の留意として、目線を上げるためにPCの下に物を置けだの、背景に気を配れだの、照明が命だ!だの、肘までアングルに入れてジェスチャーで攻めろだの、シマシマや黒一色/白一色の服は着るなだの、スマイルだ!熱意を見せろ!だの、きめ細かい(+米国的なポジティブテンション満載の)「家で録画するためのTips集」みたいな資料も提供されました(こちらは、今回会議用というより出

来合いの資料のようですが)。

結果的には、プレゼンスライドを作成するのはえらく楽チンでした。スライドを作り込む必要が無いので。その分、プレゼンの難易度は上がりますが(スライドに何も書いてないから)。例として、今回作ったものを、以前作成したものと並べて付図に示します。前述のスペックを一部無視していますが、それでもスッカスカですね。

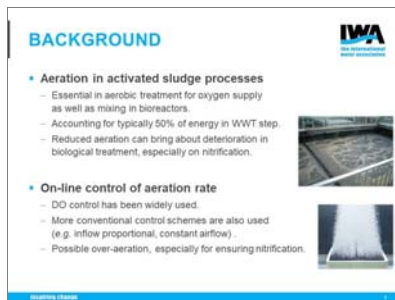
で、実際のプレゼンビデオ作成ですが、発表者の「顔出し」が所要スペックで(「聴講者はスライドを見に来るのではない、発表するアナタを見に来るノダ!」ですと...)、YouTuberどころか SNS に静止画すら投稿したことがない私は、それだけでビビってしまいました。パワポが使えるとスライド単位で撮り直しができるので気が楽なのですが、会社で使用している旧バージョンのパワポでは音声しか付けることができず、いろいろと試行錯誤した結果、Zoom の独り会議で対応することにしました。Zoom で一人だけで会議を開き、パワポのプレゼンを画面共有しながら小窓で自分を表示し、ごにょごにょ喋っているのを録音する、というやつです。とても簡単ですが、持ち時間 20 分のプレゼンを 1 本撮りしないといけないのが難点です。会社では静粛な環境が望めないのが在宅勤務時に自宅でやったのですが、途中で豪雨があったり、「結論」まで達した段階で謎のマイク不調が発生したりと、度々の撮り直しに何度か心が折れそうになりつつ…、何とか最後まで撮り終えました。で、早速視聴してみると、なんと平坦な英語…。自分ではそれなりに抑揚を付けていたつもりだったのですが、ぜんっぜん足りてないことがよく解りました。ジェスチャーどころか微動だにせず、スマイルもゼロだし…。自分のプレゼンを録画/録音して聴いてみるというのも、よく言われる話ですが、勉強になるものです。

今回、プレゼン動画の作成法をネットでいろいろ調べる過程で、国内の学会等でやはり録画配信方式となり、そのためのガイダンスを提示したペーパーが幾つも出てきました。PC やアプリの操作説明等はとても丁寧に作られているのですが、「(オンラインだから)こういう発表をセヨ」的な留意が少ないなあ、という印象を受けました。米国ではプレゼンに対する熱意が違うのか、あるいは日本では発表者のスキルが信用されているのか、よくわかりませんが、そういう意味では、今回は良い経験ができたのかも知れません。また、私が見た範囲では、日本では顔出しを前提にしているものが見られず、「スライド+音声のみ」がデフォルトっぽい感じでした。オッサンが喋っている動画を見せることに実質的な意味があるのかどうかは兎も角、感情的には、発表者の姿が見えている方が、各段と聴き易くなるような気がします。スライドの作成法についても、これまでは「読んでも理解できる」スライドが正解だと思っていましたが(喋る内容がスライドを超えないような棒読みプレゼンは論外として)、今回のような「聴いてもらう」こと重視のスライドも、今後は選択肢かな、と考えています。今後、国内でも、PC やカメラに向かってプレゼンを行う機会が増えそうですし。個人的には、たくさんのヒト達を前に喋る方が、圧倒的に気持ちがよいのですが。

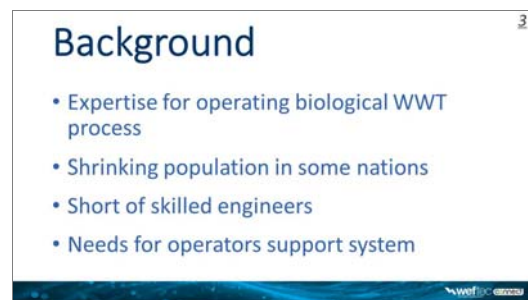
最後に、プレゼン以外で面白いと思った点の一つ。各発表者が、聴講者のための「5 つのクイズ」を作られました（何と面倒な…）。発表を視聴した後でスマホアプリでクイズに挑戦、というノリだと思いますが、これに限らず、同会議の説明の中では、やたらと”education”という単語が出てきます。要は、研究発表会は、発表の場というよりも、「学習」の場なのですね。なかなか興味深いです。

※本稿で紹介した私のプレゼンは、以下の通りです。WEFTEC 2020 に参加される方は、是非、視聴して頂ければと思います（←ウソです、恥ずかしいのでスルーで…）。

- ・ セッション名： **Optimizing Energy Through Advanced Aeration Control**
- ・ 発表名： **AI-Based Guidance System of Operating Parameters for Municipal Wastewater Treatment**
- ・ 発表者名： **Hiroki Itokawa**



(a) 過去に作ったもの
(字が小さい&多い)



(b) 今回作ったもの
(スカスカ)

付図 今回と過去のスライド比較（寸法の違いは指定の縦横比の違いによる）